WASON
HQ
1104
J74+

July 20
1885
no. 1

驛遞局認可

明治十八年七月二十日發行

女學雜誌

第壹號

東京萬春堂

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

皇后宮

つかさびと君をことほぐ大庭にゆきまの梅もさきそめにけり

●女學雜誌第壹號目次

神功皇后の御圖●宮内女官姓名錄●發行の主旨●雜報數十件●善惡娘の比較●祝文三章、和歌二首、詩一首●川島八重子傳●歌道と歌風の辨、枕詞の說、文字を書く時の心得、今古和歌三首●假粧と鏡の事、月琴獨稽古附圖、躍の話、香袋の製方、膚色を白くする法、聲音を清朗よする法●女の五ツ文字、清貞、各國婚姻の風習、遊女四季花の見立數件、女訓金言二件、麗八、ランプの煙を止むる法、冷飯を焚立のごとくする法●問答、鶴龜梅松竹の問外二件●鬪文一題、日本婦人改良論●諸廣告

七月二十日

明治十八年間 女學雜誌發兌日表

月		
七月	廿日	
八月	十日	二十五日
九月	十日	二十五日
十月	十日	二十五日
十一月	十日	二十五日
十二月	十日	二十五日

廣告價正表

一行一回揭出	但廿三字詰	前金五錢
同三回以上	同	同一割引
同六回以上	同	同二割引

報告

當分毎月二回の發行と定むると雖ども事業の整頓するに隨ひ漸次回數を增加して毎週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵税共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但し不得已者に限り郵錢切手一割增にて申受候●爲替は東京麻布飯倉郵便局へ向け御振込被下其爲替券を弊堂に御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵税表

一冊	正價四錢	郵税一錢	合計 現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計 前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計 前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計 前金壹圓卅錢

但し毎號拾冊以上づゝ取纏めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

神功皇后

神功皇后ハ仲哀天皇の御きさきなり幼くましませし時より御かたち世にすぐれおん智恵いたつて賢くよく道を行ひ玉ふ然るに蝦夷が島より御貢物をそむきて奉らざりければ天皇大に怒り玉ひ大將くまをそといふ者を討んとて軍に立玉ふをくまをそ却て天皇を射奉りたり皇后ハ武内の宿禰と御企てありて其仇を報じすぐに高麗をしたがへ玉へど新羅百濟の王も倶に出來りて日本にしたがひ貢物を奉るべしと降參仕りたり

●宮内省女官錄（明治十八年七月十五日調）

典侍
東京　從四位　室町清子
同　從四位　萬里小路幸子
京都　從四位　高倉壽子

權典侍
東京　正五位　柳原愛子
同　正六位　千種任子
同　正六位　小倉文子
同　正六位　平松好子

掌侍
東京　正六位　石山輝子
同　正六位　中御門隆子
同　正六位　唐橋貞子
同　正六位　壬生廣子

權掌侍
鹿兒島　正七位　税所敦子
滋賀　正七位　樹下範子
東京　正七位　萬里小路貞子
同　正七位　吉田瀧子
同　正七位　園祥子
同　正七位　吉見光子
同　正七位　竹屋津根子

七等出仕兼命婦
京都　正七位　三上文子
同　正七位　堀川武子
同　正七位　松室玶子

命婦上等給
東京　從七位　藤島朝子

權命婦
大坂　正八位　西西子
滋賀　正八位　生源寺政子
大坂　正八位　中東明子
京都　正八位　鴨脚八十子
滋賀　正八位　生源寺いさを
東京　正八位　平田三枝子
滋賀　正八位　生源寺須賀子
京都　正八位　梨木房榮

十三等出仕
東京　吉田愛

女孺
京都　山口益子
同　寺島富子
同　虫鹿貞子
同　古谷建子
同　中大路岩子
同　北大路忠子
同　市岡胡子
同　柏村經子
同　深尾栢子
東京　伊丹鹿子
京都　伏屋守子
同　小島秀子
同　山下峯子
東京　多榮子
京都　山口兼子
東京　賀川滿野

權女孺
京都　赤塚菊子
同　勢多威子
同　罰本さと
同　津田八十
東京　松室千重尾

十五等出仕
東京　羽倉豊子
京都　堀内素子
同　小泉福子
同　山科直子
同　北大路盛子
同　山田重子
同　森島祇子
同　岡本貨子
同　東儀鶴子
同　岡本高子
同　土山松子
同　吉見德子
同　岩波悅子
東京　多閑子
京都　辻竹子
廣島　藤井志奈
京都　伊東澄子
同　關根照子
同　橋本節
愛知　前島ぎん
京都　菅野能布
東京　山田稲子

（未了）

女學雜誌第壹號（明治十八年七月二十日）

○發行の主旨

吾等の母となりて吾等を護り育て吾等の姉となりて吾等を導き教へ吾等の妻となりて吾等を助け慰め其情ハ花の如く其愛ハ蜜の如く暴武なる世の有樣をして滑かに且つ軟かならしむるものハ即ち婦人女流なり世もし婦女なからんか野蠻暴亂の有樣久しく絶ゆるとなく温粹謙和の風習決して行はるゝことなく人類の種亦た全く斷絶せん婦女の吾等と世上とに於ける功德ハ非常なるものと云ふべし然るを世の進まざるときハ力弱き者大率ね輕ろしめらるゝの理あるより婦女はいづこにも皆な男子の下に壓せられて遂にハ女子を以て到底男子に並立せる能はざるものとならしめ彼の希臘に名高きソクラテスはその身の婦女ならざりしことを日々に感謝し支那三千年の大聖人孔子ハ女子と小人を養ひ難しと云ひ天竺佛教の祖釋迦ハ小人と女子と近け難しと云ふに至りき世上の男子もと自ら婦女を屈せしめて而して今は之を自らに劣れるものとなせる慘の甚しきものと云ふべし例ふるに父母もし子を教へずして之を不才たらしめ其の長じて爲す有るなきを見世の子たる者も到底不才なりと云はんに人之を何とか云はん今の人の婦女を輕ろしむる亦た此の類ならむ

吾日本國内の景況或ハ之に似たるなからんか西洋學者の言に國内婦人の地位如何を見れバ以て其國文明の高下をさとるべしと云へり吾國現今の婦人を見て日本ハ尚ほ開化せし國に非ずと云ハれんに今ま之と言ひとくべき理なきを憾む吾等平生いたく之に慨し且つ吾等の母吾等の姉吾等の妻の何故にかく世に輕ろしめらるべきものなるやを憂ひ曩に女學新誌を發刊して專ら婦女改良の事に勉め希ふ所ハ歐米の女權と吾國從來の女德とを合せて完全の模範を作り爲さ

んとするに在りき然るに世上の風潮其后漸く一變し婦女の社會往々に有爲の會合を出し且つ世間普通の新聞紙まで今まハ大に此の一事に注目して時事新報ハ婦人論を出し日々新聞ハ離婚論を掲げ其他往々同様のことを論らふものいよ／＼加はるに至りたこれ固より世上風潮の勢ひを得ずして一變し來りたるものなるべしと云へどもろも／＼亦た吾等の素志の万一爲めに其の果を得たるに由るなきを得んやされバ此をより一層奮發してます／＼世の需めに應ぜんとするに當りにハうに女學新誌の編輯を一時謝絶す可き事情出來したるを以て玆に更に女學雜誌を出刊し前志を續ぎて此れより一層の奮發を爲し日本の婦女をしてろの至るべきに至らしめんことを希圖す玆に第一號を刊そるに臨み之を緒言とす

雜報

●女官の運動　典掌兩侍以下の女官ハ是迄非番の節各自宅にて休假なせしが今後ハ身体の健康を要するが爲め毎休日にハ芝濱兩離宮幷に各皇宮地御用地幷に植物御苑内等に於て運動する事になりしと

●忌引を許さる　早蕨權典侍には父にて在する柳原光愛君の御病氣重らせられ既に薨せらるゝの前日御暇まを賜ハらせられて邸内に參られ御侍養ありしに老公には思ひ掛けあき對面とて太く喜び在せしが其甲斐さへもあぢきなく黄なる泉へ赴かれしに付き定規の忌引を願ひ出られ即日御聞届け相成りし由

●婦人慈善會　同會にてハ去る四日午後四時より伊藤、井上、大山、前田、鍋島、戸田其他の貴婦人一同鹿鳴館に集會して當秋開會の順序其他組合人名割施與方法等を相談せしが開會ハ來る十月中旬と粗ぼ決定なせしとのことなり

●貴女羅馬字を賛す　近頃ろ世間に其の評判高き彼

ハ羅馬字會々員の數は既に三千餘名に達し岩倉公令婦人、大山伯令夫人、佐々木伯令孃獨逸公使夫人が此のほど該會に入會せられたりと聞く斯道ふ世も亦盛なる哉

●青婦女禮式會　諸禮式の家本小笠原清務氏の發企にて華族方の婦女子に毎月兩回づゝ禮式會を演習せしむる會合を開かむと目下協議中のよし

●舞樂會第一期閉會式　昨年十月以來毎月曜日毎に鹿鳴館に於て催さる踏舞會も追々暑氣に向ふを以て去る廿九日第一期閉會式を行ハれたり當日來會せられたる會員は岩倉公爵夫人、鍋島、前田の兩侯夫人及び伊藤、井上、佐々木の伯爵夫人を始め貴婦人紳士凡そ七十餘名にして幹事長鍋島侯は會員一同に代り踏舞教師「ヤンソン」氏音樂教師「ミス、ローレ」婦人に丁寧の謝辭を述べ且謝儀として「ヤンソン」氏には銀細工の吸煙具一式「ローレ」婦人にハ金の頭飾を贈られたり右畢りて教師「ヤンソン」氏答辭を陳ぶ其の大意左の如し

貴婦人及び紳士　始め余が西郷伯閣下の依囑を受けて本會の踏舞教員たる榮を辱うせし以來會員諸君の常に厚意友情を以て余を遇せられたるは余が深く感佩する所なり殊に今夕鍋島幹事長は過當なる褒辭と貴重なる物品とを余に贈りて以て諸君の好意を表せられたるに至りてハ余の敢て當らざる所なり必竟本會の此の如き盛況に趣きしは全く余の力に非ずして會員諸君の技藝に熱心なると鋭意貴國婦人社會の進歩を圖らるゝに因る者なりと謂はざるを得ず然るに踏舞の事たるや貴國に行はるゝ日尚淺きを以て世間往々其の何物たるを知らずして漫りに其の利害を論ぜむとする者なきにしもあらず然れども會員諸君が既に知らるゝ如く泰西諸國に於てハ朝廷を始め凡上流社會の交際ハ必踏舞を以て其の主とすとも謂べき者なり是れ他なし踏舞は自然交際の媒たる性質を具ふるのみならず又下の如き利益あるを以てなり(第一)踏舞は身体の發達を助け就中婦人方の運動に最適せる事(第二)踏舞ハ精神を活潑にし婦人方の深窓に鬱悶するが如き弊を除く事(第三)踏舞ハ必高尚なる音樂に伴ふ者なるを以て之れを學ぶ者ハ自然音樂の嗜好を進むるに至る事(第四)踏舞ハ「動作の美術」と稱し之れを學ぶ者は聚散離合進退周旋等に慣熟するを以て平素の行儀法も自ら節度に當りて堅くるしからず男子ハ粗野に陷らず婦人ハ優美れ風采を具ふるに至る事以上ハ其の概略なり然るに貴國に於てハ其の利益遙に上に述ぶる所の者に超ゆ踏舞

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れ自然婦人高尚の交際を進むる媒となり隨て社會上婦人の位地を高むる階梯となるべし是れ蓋し諸君の舞樂會を起せし所以にして諸君が必ず耐忍と勉勵を以て其の目的を達し日本の開化を補はれむとは余の篤く信ずる所なり

次に幹事高木君ハ起て井上外務卿が鹿鳴館を貸與せられ河村海軍卿が音樂師を差向られ西郷參議が踏舞教師を差向られ伊藤參議が毎會臨席して會員を奨勵せられたる事等に對し會員一同の謝意を演べて其式を了りて夫より晩餐の會食あり食後樓上に踏舞を催し方舞圓舞各其の技術を奏し一同秋季開會の時を期して握手散會せられたりきとぞ

●唱歌學　山梨縣女子師範學校にては今回唱歌學を教則中に加へ文部省所轄の本郷音樂講習所より教師を雇入るゝ事となしたるよし

●婦人束髮會　麹町區衛生會の發起者渡邊挌氏ハ此頃と經濟雜誌社の石川氏と共に婦人束髮會なる者を設けんと企てたり是ハ我國婦人の種々の結髮を廢して西洋風に改むる目的にて渡邊氏は去る廿八日大日本私立衛生會に於て此束髮會は衛生上經濟上に非常の益ある趣を述しに贊成者頗ぶる多かりしと

●感心な姉妹　島根縣士族稻塚和平氏の長女てふ次女きやうの兩人はレースを製造することを學ばんとの志願にて先般姉妹連にて出京し日吉町の同製造教場へ出願し此程許可になりしと感心〳〵

●看病婦教習所　我國從來善良なる看病婦に乏しきを歎せられ高木兼寛君を始め有志者の盡力にて今回いよ〳〵看病婦教習所を有志共立東京病院内へ設立することに決し漸次地方へ敷及せしむる目的なりと云へり

右も入院患者に就きて實地看病法を教へ且つ生理藥劑解剖其他の看護法則を置きて之を學ばしめ二ヶ年を學期として就業せしめらるゝ都合なるよし右に付き貴婦人方も多く加勢せられし由なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●藝妓の抹茶　一時は流行物今は形もなく所謂イ、タチコッコの慰みに似たれども是も世の變象にて免れざるの數なりと堅ッ苦しく云ふたは及ばぬ元來阪地の藝妓等は去る明治九年比月琴の流行し節は我勝に月琴の稽古に掛り月琴の一面づゝは各自に掛居りしが何時か之も持腐れとなり其後は圍碁の流行に又又其稽古を始めやつと此ごろお相手と云ふ位に及びしが如何なる風の吹廻しにや又候抹茶の流行に變じ此程中より座敷へ呼れる毎に時ならぬ紅粱を顏に散す事のあるにぞ今度は抹茶の稽古をせねばならぬと流行妓は宗匠に依賴み敎へを受けるものもあれど中等以下は此不景氣に稅金も納まり兼るに割の高い抹茶や菓子料を拂ふた上に宗匠への月謝までは所詮逐付ないと心配して居るを取締が聞付けて藝妓が抹茶を嗜むには疊障りから女禮式を一切心得がゝねば拍子外れて異しいと云ふ所から各花廓の女子手藝學校へ抹茶の一科を加へて悉とく入校せしむる事に決したりと云ふ

●女工の募集　大倉省印刷局にては今回女工を募集せられ是までの男工は悉く刷版部に使用し他の各部は此の女工を使用せらるゝ由追々は何れも女工に替へらるゝ御都合なりといふ又た日本製藥會社にては今回女工を雇入れて製藥の罐詰及び調劑法等を傳習せしむる由なり

●長壽の婦人　長崎八幡町四十二番地の荒木エツと云ふ老女は天明四年四月十五日の出生にて本年百一年二ヶ月なるが平生中々壯健にて裁縫家事萬般を取扱ふに少しも盛年に異ならず該家は長壽筋と見え其の母も百十年迄長生せしとぞエツの長女は今年七十五、次女は六十一、三女は五十六、孫は四十五年を頭として二十二年迄十三人、曾孫十二人、玄孫一人親類凡五十餘人なるは實に目出度一家と云ふべし

●日本の手踊を賞美す　我國にては歐洲風の踏舞が貴顯社會に行はるゝかと思へば佛國にては日本風の手踊を賞美し紳士の令孃杯も彼の國へ出稼ぎの日本婦人に就きて學べる者もあるよしなれば今回横濱在留の佛國人某氏が八丁堀松島町の坂東美代吉外四名を雇ひ入れて同國へ伴ひ往き手踊の戯場を興行なすとか云へり

●小兒を育る人の注意　近來世間一般都鄙の別なく小兒を嚇すに「お巡りさんが來るぞ」とか又は「お巡りさんにヤッて仕舞」抔いひ兎角巡査を見て恐怖せしむるの弊あり之に依て街頭に吟ひて迷兒となり最はや四五歳にて言語も能くするものにても巡査を視れば恐れ戰きて泣叫ぶの如きあり又は溝渠等に陷たるとき巡査の來り之を援けんとするも巡査の方に近よらで却て深みに避け爲に生命を危くするが如き類にて何事も父母又は保姆等の手を離れ小兒に取ては生命も危く又は此上もなく心細く思ふ場合に於ては最も憑みとあり力となりて保護に怠らざる警察官吏を平素に小兒をして之を畏怖せしむるの習慣を作るは害こそあれ利なきことには非ずやと實際其等の場合に遭際したる人の物語りにき斯言は大ひにその理ありと思へば茲に記す

○善惡娘の比較（一）

針しごとのすきな娘	おやへ惡口する娘
よみかきのできる娘	尻ッぱやな娘
繼母を大切にする娘	針しごとをきらふ娘
みへかざりをせぬ娘	夜あるきをする娘
きやうだい思ひの娘	けんどん邪けんな娘
年よりをいたはる娘	親兄弟をみすてる娘
としのひくい娘	きりやうじまんの娘
くちかずをきかぬ娘	おしやべりな娘
奉公人をあはれむ娘	ねぞうのわるい娘
とりめたゞしき娘	ぶさはふな娘

友達へしんせつある娘　朋友をそゝのかす娘
たしなみのよい娘　ついへをしらぬ娘
せけんにかしこい娘　氣のきかぬ娘
正しきりちぎな娘　手くせのわるい娘
他人の癖をいはぬ娘　朋友へなん癖付る娘
ひとをそらさぬ娘　きげんかいな娘
内しよくを精だす娘　かいぐいのすきな娘
かんにんづよい娘　かんしやくもちな娘
ものしりぶらぬ娘　まけをしみの強い娘
きれいずきな娘　いけぶしやうな娘

○女學雜誌の發兌を聞きて世の婦女子に告ぐ

北越刈羽藤井　竹田　南枝

野山の草は。青々と。日影を隱し。池川の。水は澄みつ。底を見る。實に浮世てふ。儘ならぬ。都の空に。すめる身も。時節來れば。零落て。おちこち翔る。はま千鳥。所定めぬ。たび鳥。遂に果敢なく。煙とぞ。なりぬる末ぞ。哀れなる。此のことはりを。心にぞ。留めて思ひ。わすれねば。女の道に。協ふべく。誰人にても。よれを愛で。鴛鴦の契を。願ふべし。道理知るは。易からず。これを行ふ。最も難し。されば夜ひる。思ふより。之をならへて。己が身の。榮譽と德を。輝かせ。之を學ぶに。善き規範。近藤の君と。申す人。輯め玉へし。女學てふ。雜誌とり〳〵。能く學び。見聞すること。行へて。女の道を。學ぶべし。穴賢

○女學雜誌發行祝詞

磐城　蘆野明日香

女學ノ美花開カザレバ文明ノ好實何ニ依テカ結バン窈窕ノ淑女多カラザレバ有德ノ賢士何ニ因テカ生ゼン畢竟スルニ國家開明ノ度ノ高低ハ女子ノ知識進歩ノ深淺ニ徵シテ之ヲ知ルベシ嗚乎女學ノ振興セザル可ラザル此ノ如ク夫レ急ナリ女子ノ敎育セザル可ラザル此ノ如ク夫レ要ナリ苟モ具眼ノ士誰カ率先シテ斯ニ從事セザランヤ我文部省夙ニ女子師範學校ヲ江都ニ設ケ以テ天下ノ穎才ヲ陶冶シ府縣亦タ往々此校ヲ置キ以テ養成ノ道ヲ立ツ猗嗟亦昌ンナリ矣今又タ

同好近藤君賢三女學雜誌ヲ發行シ將ニ大ニ女學ヲ裨益セントス猶春風ノ花ヲ催スガゴトシ是ニ於テ女學ノ美花將ニ爛熳タランシ窈窕ノ淑女將ニ彬々輩出セントス豈悅バシカラズヤ余似タルナシト雖モ常ニ女子敎育ヲ以テ自ラ任ス苟モ女學ニ裨益アルヲ知テ言ハザルナシ縱令君ノ請ナキモ豈默止センヤ況ンヤ遠ク書ヲ寄セラルヽニ於テヲヤ聊カ茲ニ微衷ヲ述テ以テ其發行ヲ祝スト云フ

○祝二女學雜誌發刊一　下総　大須賀さだ子

我邦女子の風俗卑屈に流れ幽鬱を以てオトナシイとなし活潑を目してオテンバといひ一事業を起さんとするもナニ女の仕事かと一言の下に擯斥せらるゝに至るハ豈慨歎の至りならずや女なりとて事の成らざるとのあるべき彼のソマービル夫人ハーステル令娘ヴルンリン孃ステール夫人ローランド夫人マーチノウ令孃の如き小野小町衣通姫紫式部清少納言赤染衛門の如き其芳名千載の後も朽ちざるなり等しくこれ人にして彼ハ尊敬せられ我ハ擯斥せらるこれ何の故ぞや他なし中古政權武門に歸して男尊女卑天地懸隔せるを以て女子ハ男子に奴隷視せられ自らも又甘んじてこれを受くの風習骨肉に銘記し一朝一夕これを改むべからざる勢に立至りしによりてなり今や王政維新文物隆盛海外諸邦と比肩するの時に方り勉めてこの弊風を打破せずんばあるべからず淡水近藤先生こゝに見る所ありて今回修正社を辞して新に女學雜誌を發刊せらる此人よりて此擧あれば我邦女流の面目を一新せる期して待つべきなり豈祝せざるを得んや賀せざるを得んや妾淺學を顧みず聊非言を吐て淡水先生の机下に呈す

○曉鶯　東京　池　きよ

春の夜の夢かとばかり聞ゆなり
明行くまでの鶯の聲

○あらし山の花見に物して

東京飯倉片町　糸の家三筋

こゝろしてくだせ筏士大井川
ちれる櫻の影さへぞなり

○看敗棋

東京　稻村　千町

正奇機變預難見。順盛逆衰俱不雙。破竹威高項王旋。可憐一跌遂烏江。

評　所謂天定勝人者。幾是歟。

○川島八重子傳（上）

上總國木更津在篠尾村に母娘二人がわびしく幽かにくれ日を送る者は幕府の士川島三四郎の後家とめ女娘お八重といふものにて徳川家の瓦解に是非なくもわづか計りの知己を便り篠尾村より引移りしが最もいぶせき身の成り果て傍のみる眼も哀きあり此とき母は娘に向ひ和女も世が世で有るならば支度も充分整へて嫁付く身分である者を時世時節と云ながら母侶ともに此難にあふ夫に付てもお國の心立さへ不良ねど望まれてゆく身の幸は今に不自由なき身の上是も生れしその時より幸と不幸は自から身に備はりし者なるが和女も姉より容貌もよく心立さへ優しきお身の如何に零落たればとて廣き野中に母侶とも住める心を思ひやる是も前世の約束と須臾堪忍してたもれ何時かは運のめぐり來て又宜き春を迎へなん先づ夫迄は兎も角と娘が心慰むる其身の胸の苦しさを匿しはそれど眼元には浮む涙をそてとりて八重は膝を進ゝ寄せあれまたしても母さんにはかなし寄とを仰せあり若しや此後お躰に障りもなさば如何せうと夫のみ苦勞でなりませぬ是も時世と諦めて暫時お忍びあれかしと母の心を推量りなぐさめられつなぐさめつ母子二個がわびしくも廣き野中に住むとても狹き草屋の荒世帯淋しさ増る秋のくれ千草にそだく

虫さへも枯がれになく聲をきく又も哀れを添るなる今ハ親子が果敢なさハ誰を力に枯尾花まねく人なき八重むぐら行みち芝の露をぶも厭ふ身なるも零落て今日ゟ明日と漸〳〵におくる光陰も矢の如く明治元年霜月中旬母ハ病ひの床につき飲食さへも通ハねばお八重ハ宛然狂氣の如く神に祈り佛に念じ其身の勞れと討忘れなぞつさそりつ介抱にいさゝか怠かハ有らねども醫師も藥もあらのなし邊鄙の地ゆへ差當りちかき最寄にありとも聞ねバ如何ハせんと途つ追つ一人思案に暮六ッ頃ろお八重の胸に浮みしハ過ぎし日横田といへる地によき醫師ありと聞つるがろの道筋も川端づたひ十八九町と聞バたづねて知れざるとやあるまじ少しも早くと身じたくなし立出んとハなしたるが此まゝ往バ母さんのお眼の覺なバ驚き玉ハん斯ハ打明てゆくにハ如じと母の眼覺を相待てとの次第をつぐるにぞ母ハ漸やく枕をあげろの心根ハ嬉しけれど馴もせられぬ山道と殊にハ日さへ暮たれバ翌日こそ往ねと止むれどお八重ハなほも押かへし其お詞に背いてハ恐れ多くハ候へど少しも早くお藥をさしあげたさが妾の願ひ平に容免したまはれと強て我家を立出でしが樹々の木梢ハ生茂り一きハ淋しき川づたひ大鳥村をうち過て横田の川邊に着たるが舟ハ向ふの岸にハあれどつなぎ留たるまゝにして呼ど叫べど船頭の出べきやうそも見えざればお八重ハ悲しさ恨めしさ夜道をかけて來りしも只母さんへお藥りを上げたい計りが我身のねがひ其渡し場へ來れしても渡しの舟の出ざるハ又なんとせん如何せうとわつと計りに泣伏して前後正躰なき折から颪にさらせし枯芦の中より現ハる古狸が此方をさしてノッ〳〵と歩み來るにお八重ハ驚ろきあなやとバかり身を起し駈出すはずみに過ちて前なる川に落入たれど引汐なるか水淺く川巾せまき流れゆへ何なく川ハ越した

れど手足ハ凍へて自由を得ねバ満たる水をしぼりもせぞやつと溜息つく〳〵も考へ見れバ狸めがわられき出ておそろしさに川へ落しゞ僥倖にて想はぞ渡しを越したる嬉しさよ此上ハ少しも疾くと醫師高松何某を漸やく尋ね母の病体を具さに語り其身が途中の難儀をも咄すと聞より高松もお八重が孝心の深さに感じ直さま篠尾ゑ同道して篤と診察を遂げ藥とあたへて歸りしが藥効忽ち著く日を追ひ全快なしたればバ親子の歡び大方ならず明治二年の二月に至り母ハ是非とも江戸に返らバ又た詮術もありなんと思ひ立てハ老の一徹止まるべくも見えぬにつけお八重も望む所なれば篠尾ハ村の人々へ殘るかたなく禮をのべ纔か計りの旅費を持ち立出たるも足弱の母子二人の女連ならハぬ山路やう〳〵と木更津港より舟に乗り江戸にハ着けど東京と名も改たまりしは初めて聞くのみ然れバ知己の人さへも皆な散々と相成りて便る家さへあらざれバ一時旅宿に身は寄せしもゼづう計りの貯へで何時まで斯ておられもせぞ如何をせんと母親が思案も尽て茫然たり

○歌道と歌風の辨

先達の説に歌よむゑ道を學ぶと風を學ぶとのけぢめあり新勅撰ハ京極黄門の撰び給へる集なれどその歌どもを見るに彼卿の執したまへるさまなるはをさ〳〵なくたゞ素直なる言の葉どものみにてみづからさへ拾遺愚草の巧に珍らしき姿なるをバいれ給ハぞあれ道はおほやけなるものなれバおのが姿のミをもむねむとハし給ハぬ廣き心より撰び給へれハ私とてまげたまハぬ也けり黄門の道をまねバんと思はん人は新勅撰の平懐なるを本とし黄門の風をまねバんとおもハむ人ハ拾遺愚草のたくミなるを本とすべし然ハあれど人おの〳〵性あれバ風ハ私ものなるゆゑ

またとへ師とたのみてならひてもまねびえがたく弟子として教へてもそれもむけ得がたかめれバ師弟の與奪はたゞ道をかりありこは新勅撰拾遺愚草にかぎれる論にはあらず紀朝臣ハ道を學ばむとならバ古今集によるべく紀朝臣の風を學バんとならバその家集によるべくなん此よしを辨へてもてあらバゝ道と風との境よくあきらめ知らるべしといへり

○枕詞の説

さて近きよハ文の中にハたゞくだ／＼しうながくのミ書きなして何のやくもなくをかしきこともなつかしきふしも見えぬハいとあやしきことならずやまたことさらに枕詞をしひてかきならべたるもいといぶかしきわざなり近きふみの序文などの中にある人のかゝれたるに一言一語も冠辭を加へざるをさ／＼なきやうなるが見ゆれど此躰は長歌などよりうつりたるにハあらぬか古今集の序にも「ひさかたの天にしてハしたてる姫にはじまりあらがねの地にしてもすさのをのミことよりぞおこりける「千はや神代にハ云々「くれ竹のよゝにきこえ「かたいとのより／＼にたえず云々「青柳のいとたへず「松の葉のちりうせずして「正木のかづら長く傳はり「鳥のあと久しくとゞまれる是らの九ツあるのみなりさて文章に枕詞を冠らするは大方ハ褒賞すべき詞の上におきたるなりすべて古文にハほめ詞の上にハ冠詞を必ずおくべき格なることは祝詞などを見てもさとりしるべし

(文話)

○文字を書くときの心得

書を寫すに同じ行の内或ハならべる行などに同じ詞のあるときハ見まがへて其間なる詞どもを寫しもらす事常によくあるわざなり又一枚と思ひて二枚重ねてかへしてハ其間一枚をミながらおとす事もありこれら常に心すべきわざなり又よく似て見まがへやす

き文字などハ殊にまがなまじくたしゝに書くべきなりこれハ寫しがきのみにもあらずおほかた物かくに心得べき事ぞすべて物をかくハ事の意をしめさむとてなればおなじく文字さだかにこゝろかゝまほしけれさるをひたそら筆の勢を見せむとのみしたるハいかなる事ともよみときがたきがよにおほかるあぢきなきわざなり常にかきかハす消息文なども文字よみがたくてハいひやるすぢもきとほらずよむ人はたくるしみてのしらかたぶゝつゝのへさひよめども終によみえぞなどしてとこゝよみがたしとかへしとハんもさすがに無禮きやうなれはたゞおしはかりに心得てハ事のたがひもあるぞかし(玉勝間)

○

國のかぜ吹ろふ時にみかぐらの
おともハよく世にひゞくらむ
權掌侍　税所敦子

○

いつのまにつもりしけさのゆきならむ
中島歌子

あかつきまでも月もみにしと

○

皇國の御爲ばかりとひとすぢよ
思ひまよハぬ敷しまの道
烈公侍女　登喜子

○假粧と鏡の事

女中の燕脂鉛粉を顔ニ粧ほふハ敢て好色の爲ニハあらず是れ禮儀なり祝事なりされバこゝろよしあるあたりに仕へ玉ふ女中も年老て朝夕も假粧し玉ふなれ賤しき市中の女も不幸あれば素顔を禮儀とし或は後家となりてハ尼になるゆゑ貴賤ともけしやうとせざるを定例とすされバ假粧を祝事とし素顔を不吉とそ是れ御國のみならず唐國共に古今の通儀なりさるのらに女としてべにおしろいをつけざるハ忌ハしき事ぞかしろのけしやうするに第一の必用あるハ鏡なりゆゑに鏡は女の守りとも女の魂ともいふは俗言にあらず縁故あるとなりけり

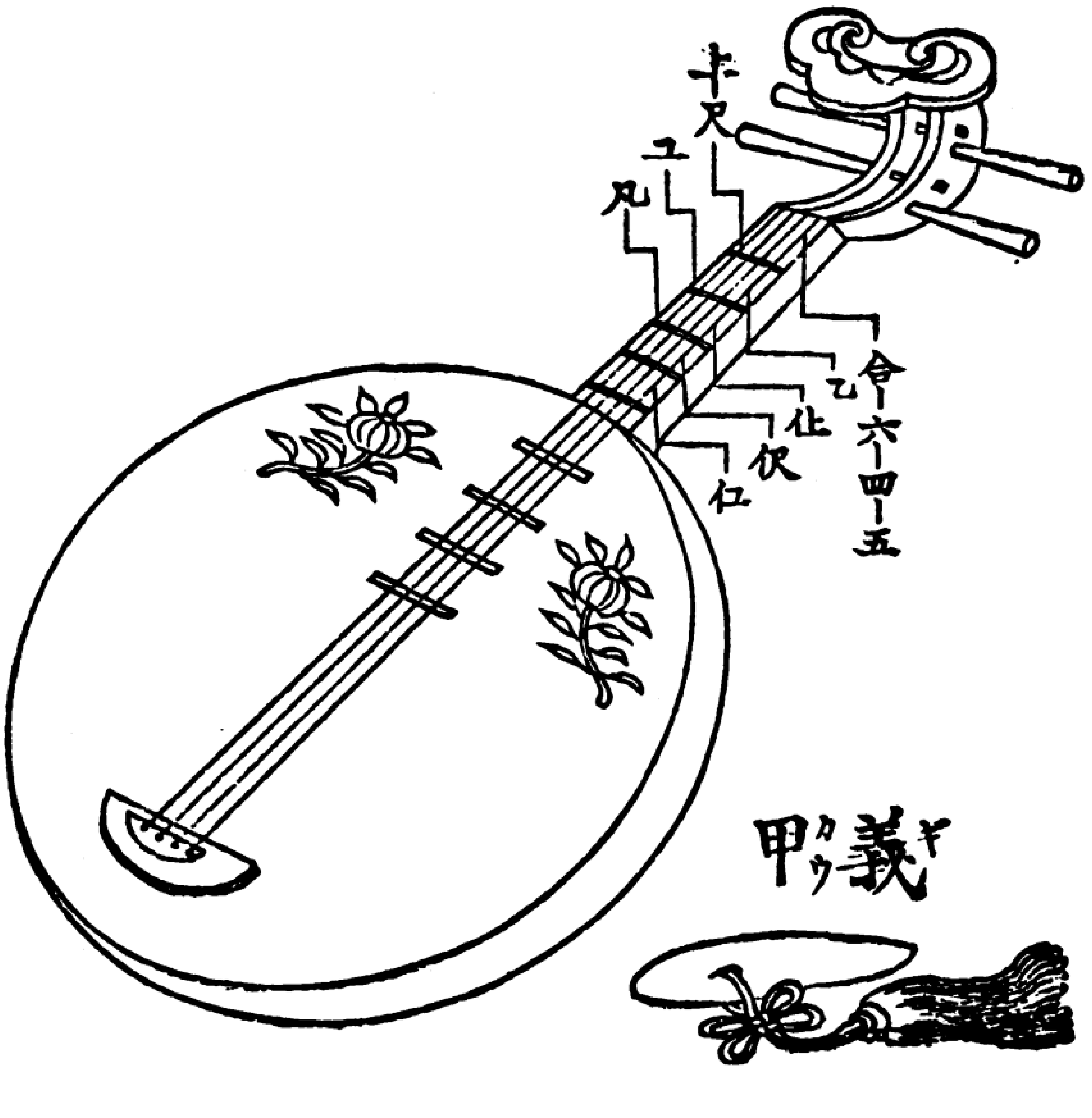
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○月琴獨りいて

月琴は清樂の一器にして最も初進の手解き也先づ是を覺ゆるには譜節を暗記すべし而して後ち三絃の如く左の手を棹にかけ右の手に義甲を親指と人指中高指の間に挾み半月より五六分の所を彈く也上の二系を(上)と云ひ下の二系を(六)と云ふ凡て二系を同時に彈くを常とす

(上)は上の二系を押へずして彈く也(一尺工凡)は定律を押へて彈くなり又下の二系にて(合四六五)は同律を四手にひく也即ち(合六)は押へずして彈き(一四五)は押て彈く也(仩伬仜)は夫々律を押てひく也下の圖に就て熟知すべし譜中(乂)を二度引返す所なり

上尺工凡四合五六乙仩伬仜



清樂譜（一）

算命曲

上尺工六工々六工上尺工尺尺六工々
上尺工尺四上尺上四合四合○又○

○躍の話

歌や三味線は人の耳を樂ましむるものにして踊は人の目を喜ばしむるものなり而して踊に三種あり曰く能曰く芝居曰く所作即ち是れなり去れど能と芝居は後日に讓りて今茲にお話し申すは所作のとなり抑も此の所作踊りに又た數派あり曰く中村曰く藤間曰く坂東曰く西川等なり

すべて踊を學ぶは何人にても宜しく決して其の人の如何を問はざれどもちとふとくしたる人などがやさしき女の踊りをするは至て不釣合にして見惡くきものなれば此等の人は斯る踊りは先づせぬが宜しきこと也去れど寧ろ大ふとりなる人なればやさしき女がたになるもしぼけて一入面白ろきものなり故に並み外れてふとりたる人なればやさしき女がたになるも亦宜しとす

（跡は次号）

○香袋の製方

第一方　龍腦、甘松、三奈、乳香、丁子、白檀、沈香各五匁麝香一匁以上の八味を粗く刻みて絹の袋に入れ置くべし

第二方　沈香、貝香、丁子各四匁白檀三分薫陸三分麝香二分以上の六味製方前に同じ

第三方　沈香一匁、丁子八分、甘松八分、白檀一匁二分麝香四分龍腦二分以上の六味製方前に同じ

○皮膚の色を白くする法

雪花菜を擂盆にてよく擂りこれに卵の蛋白少許を加へ又た水を和ぜて之を毎夜臥やうとするとき顏其外白くしやうと欲ふところに塗擦くべし斯くして永く怠らねば屹と色が白くなるものなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○音聲を淸朗にする法

桔梗二匁乾姜一匁烏梅五分甘艸五分以上の四味を細末配劑し毎日一二回白湯にてその少量を服すれバ音聲自から淸朗艶美を極むると實に望外に出るに至るべし

○女に五ツ文字

○淸　それ女に五ツ文字といふ事ありその五ツハ淸貞美閑貽なり先淸とハ身たしなみ也みめかたちこそ生れつきなれどたしなみあしけれバ美しきも見にくかるべしおよそ女はきよく髮化粧怠たるとなきハ夫を敬まふ禮義なれバいやしき方にうつらぬやう心がけべし禮の九容といふハ一にあしのあるき方二に手を猥りにさし出さぬ三に目の形ち正しく遠きかた〳〵を見めぐらさぬ四に口をたしなみ言葉多くせぬ五に聲を靜かにつゝしむ六にかたぶきそバたゝぬ七にいきざしあらゝかならぬ八に立すがたに心をつけ九に衣服の見にくからん事を心づけよとなり此心のうたに「すがたこそうまれつくとも我心うつさバよきにうつらざらめや」

○貞　貞とハ操正しく仮にもほかの男に目もふれぬをいふむかしあるやごとなき軍大將の出陣したまふ時内室のもとへ遣し玉ふ歌に「なびくなよしがませがきの女郎花男山より風ハふくとも」内室此歌に感じて深く心とゞめ留そを守り玉ふ折から敵の方より人質のために此妻室をとりに來るよし聞えけれバわれものゝふの妻なり夫のさしぞなきにいへをうごき猥りに節を改め存亡に心をかへべきやと敵を引うけ郎等にふせがせ心靜かに幼者をさし殺して宅に火をうけ自害し玉ひぬ故に人じち取こと止となり余の難も救ひ玉へりその貞心のちの世までほめざる人なし歌に「みなかみのすめるをうけて行水のすゑににおれ

る名をバ流さじ」（未了）

○各國婚姻の風習（一）　東京　松下露雪

○○希臘　此國にてハ婦女婚姻後にあらざれバ世間の交際をなすを許さゞ處女のときハ離隔たる一室に屏居もり決して人目に觸れず人間社會の取除物として人更に言語を交へず婚姻のときハ新婦ハ美々しき行列に伴ハれてろの列の中にハ樂人音樂を奏し又白衣を粧ひし處女の一隊手から花を撒て其道よ散し天女の降臨そるハ斯くころ有んかと怪まるゝ計の風情なり

○○○○西比利亞　西比利亞の中にハ奇異なる婚姻れ儀式ありて或る種屬ハ婚姻のとき新婦ハ夫の足下に平伏して其穿く所の靴を脱せり這ハ從順の義を表する者なりと云へり又或る種屬ハ妻の父より夫の方へ鞭を贈れり是ハ妻に不良の行ひあるときハ父に代りて督責そるとを夫に委そるの意あり又或る種屬ハ契約相ひ整ひて婚姻をあすとき夫ハ夜中に筵を以て新婦を包みろのとき大音を發して「狼が汝の手足を取去る」と呼びあがら物を掠め取るゞ如くに取去るを以て妻を娶るの禮とせり村落にて此聲の聞ゆるハ屢々れとなりとぞ

○遊女の心ばへ四季の花になぞらへて

千代鶴ハ　白梅

此花の心バへハ雪の中より口をきりちらりほらりと其匂ひ香しくさのミ取みだしたる色ハなけれどよろづふしたゝ定ゝんと垢ぬけしたる有様やんごとなき人のかみに置くも耻あしからさたへにやさしく少しつよみも有て只だ此白梅一本にて奥床し

小紫は　糸柳

此糸柳のこゝろバへハ只だよわ／＼といづれれかたへもなびきしたがひ萬の事すなほに情深しあながち飾り繕ふ色もなくりきみもなくつまそづれたをやかよていとかミゆし

言の葉は　玉椿

此花の傍は八重九重に色をみぶして情け深しつぼみの内より匂ひ有て今なほかんばしき花ぶさ誰に向ひてもはた〱と落安きはいともろし

吾妻は　海棠

此花は甚だつよく見ゆれども誠に眠れる花の如し寐つきにも寐覺にも笑顔よく色の程どは薄くれなひにして誰も心をとめ木のかをりいと久し（未完）

○女訓金言

女の身は一行失あれば百行成るヿなしと云ひて一の猥りがはしきヿあれば万の行儀作法はいみじくとも其身を滅すもとひとなるべければ深く恐れ慎しむべきヿなり（女論語）

身の飾りに心を用ひ過す可らずひま費へて益なし俗人奴婢の輩にほめられんとて衣服をかざれば識者はいやしめらる何の益もなくはかなきことなり

（大和俗訓）

○麗人

捧心嬌態黯如愁長使東隣欲效尤（西施含顰圖）

疑是陽和三月暮楊花飛處牡丹開（雪中妃子圖）

歌罷霓裳一曲歡酒醺無力上雕鞍（貴妃春醉圖）

空談卓氏憶華年涙説文姬識斷絃（美人彈琴圖）

貞心試託湘江竹吹向沸雲與鳳聽（吹笛仕女圖）

妾心不憶交河冷手冷難裁金剪刀（月下裁衣圖）

欲呼回首不知名背立東風幾許情（背面美人圖）

○ランプの烟を止むる法

燈心を酷き酢に浸し乾して用られば烟らぬばかりでなくよく燃るゆゑ少しの手數で經濟になります

○冷飯を炊立のごとくにする法

この法は先づ火を焼きて釜を煖めこれに冷飯を入れ水を少許釜の内側へうちて堅く蓋をなしおき暫して後ち飯桶にうつすべし少しも炊立に異りません

問答

●鶴龜松竹梅の問（一）　日本にて鶴龜松竹梅を以て祝と爲せしハ何れ世に起るや又其の原因を併せて問ふ（山城、野口濱子）

●歌の意義の問（二）　ふたつもじ牛のつのもじすくなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆるてふ歌の意義御明解を乞ふ（大須賀さゞ）

●石女の問（三）　懐任せざる婦女を石女といふ故事如何（東京、磯村みね）

闘文

論題

○日本婦人改良論

甲點（賞　女學雜誌卅冊分無代價呈上）
乙點（賞　女學雜誌廿冊分無代價呈上）
丙點（賞　女學雜誌十冊分無代價呈上）

今回弊堂に於て右闘文の文題を出し衆評の上甲乙丙の點評を付して前記の賞を呈上可仕候間玉文御投寄の諸君は何卒國郡町村姓名年齡等詳細御附記の上續々御郵送奉願上候但し來る九月二十五日以後に來着したる者ハ採錄不仕候間夫迄に相届き候樣被成下度候以上

女學雜誌本局　萬春堂敬白

廣告

淡水近藤賢三先生編輯

○文學雜誌　初號八月下旬發行　壹冊定價現金五錢

淡水近藤先生ハ幼少ヨリ文學ヲ嗜ミ或ハ師友ニ叩テ其秘訣ヲ究メ或ハ文藉ヲ博覽シテ其蘊奥ヲ探リ自ラ發明セラル、所鮮ナカラズ弊堂今回先生ニ乞フテ文學雜誌ヲ發行シ普ク文學後生ヲ補益スル所アラントス而メ其体裁ハ開卷ニ作文論ヲ掲ケ第二ニ文學雜報ヲ記シ第三ニ文雄列傳第四ニ作文金言第五ニ頴才詩文第六ニ文範文例第七ニ古文講義第八ニ助語實字虛字解第九ニ文家雜錄第十ニ文藝問答其他ニ俗文狂文俳文小說文速記法寫字法畧文法等の解說及ビ羅馬字會假名會英文獨逸文朝鮮文等苟モ文章ト名ノ付クモノハ悉皆網羅シ盡シテ遺スナカラントス四方御賛成ノ文學篤志者ハ端書ヲ以テ至急御注文下サレ度右廣告仕候以上

東京芝區櫻川町八番地
發行所　女學雜誌本局　萬春堂　敬白

近藤賢三編撰

○神童詩文　正價郵稅共金八錢

此書ハ嘗テ闔國學童ノ詩文ヲ募集シ其中ニ就キ傑作名吟ノミヲ撰拔シテ之ニ評語ヲ附記シタル未曾有ノ珍本也弊社既ニ數千部ヲ賣出シ今減價ヲ以テ御注文ニ應ズ江湖ノ老少各位共ニ御購覽アリテ神童ノ心血ヲ味ヒ玉フベシ

東京芝櫻川町萬春堂內　摘英社

弊堂今回女學雜誌ヲ發行スルノ廣告ヲ頒布スルヤ四方ノ閨秀紅裙ヨリ續々金作玉文ヲ投寄セラレ机上積テ山ヲ成スニ至レリ然𪜈紙數ニ限リアルヲ以テ悉皆ヲ第壹号ニ採錄スルヲ得ズ乃チ第貳号以下ニ分掲セントス投書家各位請フ之ヲ諒セヨ

女學雜誌編輯係

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

言の葉は　　玉椿

此花の儚は八重九重に色をみざして情け深しつぼみの内より匂ひ有て今をほゝんばしき花ぶさ誰に向ひてもはたくと落安きはいともろし

吾妻は　　海棠

此花は甚だつよく見ゆれども誠に眠れる花の如し寐つきにも寐覺にも笑顔よく色の程どは薄くれなひよして誰も心をとめ木のゆかりいと久し（未完）

○女訓金言

女の身は一行失あれば百行成るとなしと云ひて一の猥りがはしきとあれば万の行儀作法はいみじくとも其身を滅すもとひとなるべければ深く恐れ慎しむべきとあり（女論語）

身の飾りに心を用ひ過す可らぞひま費へて益なし俗人奴婢の輩にはめられんとて衣服をかざれば識者にいやしめらる何の益もなくはかなきことなり

（大和俗訓）

○麗人

捧心嬌態黯如愁長使東隣欲效尤　（西施含顰圖）

疑是陽和三月暮楊花飛處牡丹開　（雪中妃子圖）

歌罷霓裳一曲歡酒醺無力上雕鞍　（貴妃春醉圖）

空談卓氏憶華年涙說文姬識斷絃　（美人彈琴圖）

貞心試託湘江竹吹向衡雲與鳳聽　（吹笛仕女圖）

妾心不憶交河冷手冷難裁金剪刀　（月下裁衣圖）

欲呼回首不知名背立東風幾許情　（背面美人圖）

○ランプの烟を止むる法

燈心を酷き酢に浸し乾して用うれば烟らぬばかりでなくよく燃るゆゑ少しの手數で經濟になります

○冷飯を炊立のごとくにする法

この法は先づ火を焼きて釜を煖めこれに冷飯を入れ水を少許釜の内側へうちて堅く蓋をなしおき暫して後ち飯桶にうつすべし少しも炊立に異りません

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

●鶴亀松竹梅の問（一）　日本にて鶴亀松竹梅を以て祝ひと爲せしハ何れの世に起るや又其の原因を併せて問ふ（山城、野口濱子）

●歌の意義の問（二）　ふたつもじ牛のつのもじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆるてふ歌の意義御明解を乞ふ（大須賀さゞ）

●石女の問（三）　懐任せざる婦女を石女といふ故事如何（東京、磯村みね）

闘文

論題

○日本婦人改良論

甲點（賞　女學雑誌卅冊分無代價呈上）

乙點（賞　女學雑誌廿冊分無代價呈上）

丙點（賞　女學雑誌十冊分無代價呈上）

今回弊堂に於て右闘文の文題を出し衆評の上甲乙丙の點評を付して前記の賞を呈上可仕候間玉文御投寄の諸君は何卒國郡町村姓名年齢等詳細御附記の上續々御郵送奉願上候但し來る九月二十五日以後に來着したる者ハ採録不仕候間夫迄に相届き候樣被成下度候以上

女學雑誌本局　萬春堂敬白

廣告

淡水近藤賢三先生編輯

○文學雑誌　初號八月下旬發行　壹冊定價現金五錢

淡水近藤先生ハ幼少ヨリ文學ヲ嗜ミ或ハ師友ニ叩テ其秘訣ヲ究メ或ハ文藉ヲ博覧シテ其蘊奥ヲ探リ自ラ發明セラルヽ所鮮ナカラズ弊堂今回先生ニ乞フテ文學雑誌ヲ發行シ普ク文學後生ヲ補益スル所アラントス而メ其体裁ハ開巻ニ作文論ヲ掲ケ第二ニ文學雑報ヲ記シ第三ニ文雄列傳第四ニ作文金言第五ニ頴才詩文第六ニ文範文例第七ニ古文講義第八ニ助語實字虚字解第九ニ文家雑録第十ニ文藝問答其他ニ俗文狂文俳文小説文速記法寫字法畧文法等の解説及ビ羅馬字會假名會英文獨逸文朝鮮文等苟モ文章ト名ノ付クモノハ悉皆網羅シ盡シテ遺スナカランコトス四方御賛成ノ文學篤志者ハ端書ヲ以テ至急御注文下サレ度右廣告仕候以上

東京芝區櫻川町八番地

發行所　女學雑誌本局　萬春堂敬白

近藤賢三編撰

○神童詩文　正價郵税共金八錢

此書ハ嘗テ闔國學童ノ詩文ヲ募集シ其中ニ就キ傑作名吟ノミヲ撰抜シテ之ニ評語ヲ附記シタル未曾有ノ珍本也弊社既ニ數千部ヲ賣出シ今減價ヲ以テ御注文ニ應ズ江湖ノ老少各位共ニ御購覧アリテ神童ノ心血ヲ味ヒ玉フベシ

東京芝櫻川町萬春堂内　摘英社

弊堂今回女學雑誌ヲ發行スルノ廣告ヲ頒布スルヤ四方ノ閨秀紅裙ヨリ續々金作玉文ヲ投寄セラレ机上積テ山ヲ成スニ至レリ然ドモ紙數ニ限リアルヲ以テ悉皆第壹号ニ採録スルヲ得ズ乃チ第貳号以下ニ分掲センコトス投書家各位請フ之ヲ諒セヨ

女學雑誌編輯係

東京大學文學部長外山正一●文部省御用掛大槻文彦両君序●●東京大學理學部教授東京物理學校長寺尾壽君跋●●日本傍聽筆記學會創立員速記法研究會員林茂淳氏編著

●早書き取りの仕方

定價廿錢 郵税四錢

この書ハ講義演説談話などを其ことばの儘に少しも違ハぬ様に寫し取る仕方をやさしく説き明したるものなり

發兌 東京日本橋區馬喰町二丁目壹番地 石川治兵衛

子宮病のめうやく

○女寶散

定價 大包五日分金三十錢 小包一日分金七錢

この女寶散は專ら經水の不順を調へ子宮の衰弱たるを補ひ血液の不足を充し懷妊せざる女をして子を孕ましめ殊に產前は能く精血を溫養して胎兒を保安するの功能あるが故に小產難產の憂を免る等實に靈妙不思議の神功ある他家無類の良劑なり但し効能用ひ方は能書に委しく記す

發賣 東京々橋區新肴町十四番地 樂榮堂國米基造

本舖 同南傳馬町一丁目十二番地 利濟堂國米精一

保證廣賣 東京銀坐 岸田 同池之端 守田 同大坂町 高木

文部省御藏版

○小學校用書籍各種

大賣捌所 東京芝區西ノ久保 萬春堂

○東京教育新誌

一枚二錢十枚前金十九錢郵税一枚一錢宛

大賣捌所 東京西ノ久保櫻川町 萬春堂

○詩文添削

添削料郵便切手代用ナラバ三割增但シ一錢切手ノコト

絶句一首一錢五厘○律一首三錢○排古各一首六錢○文一篇八錢但シ五百字迄ノコト五百字以上廿五字每ニ五厘宛增加

麻布富士見町廿番地 稲村城山

○歌文改正

謝儀ノ有無ヲ問ハズ廣ク閨秀諸君ノ需メニ應ズ

磐城國東白川郡竹貫驛寓 蘆野明日香弘報

愛顧諸君ニ告グ

小生今回修正社女學新誌ノ編輯ヲ解約シ更ニ萬春堂女學雜誌ノ編輯ヲ擔當致シ候間舊來ノ愛顧諸君ハ何卒御賛成御購讀アランコトヲ希望ス

近藤賢三敬白

前金御注文の花客へ左之通無代價呈上

十冊前金御注文の花客へは壹号限り無代價呈上廿冊同二号限り無代價呈上卅冊同三号限り無代價呈上見本は四錢封入にて御申込あれ

萬春堂會計係

東京芝區西ノ久保櫻川町八番地

發行所 萬春堂

持主兼印刷人 大庭宗吉

編輯人 近藤賢三

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町 巖々堂
同 神田區雉子町 團々社
同 日本橋區新葭町 長明堂
同 京橋區木挽町一丁目 萬字堂
千葉縣千葉本町一丁目 立眞社
愛知縣名古屋本町二丁目 石版社

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY